

Sujin Memory Bank Project

2018年度活動報告

近年、アーカイブという言葉は、公的な文書記録ならびにそれを管理する公文書館といった旧来の意味を超え、その概念を拡張させている。そこで期待されているのは、単なる記録の保管庫といった静的な場ではなく、新たな価値が生成する動的な場としてのアーカイブである。本研究はアーカイブの今日的な可能性を、とりわけ柳原銀行記念資料館が所蔵する記録資料を軸に実践的に考察することを目的としている。

柳原銀行記念資料館は、1899（明治 32）年に柳原町（崇仁地域）の町長であった明石民蔵らによって設立された柳原銀行の建物を移築・復元したもので、1997（平成9）年に開館して以来、地域の歴史、文化、生活資料の収集・展示を行ってきた。しかし、その一方で、本館が収蔵する映像資料、特に写真資料についてはこれまで資料的価値が認められず、死蔵されてきた。本研究プロジェクトは、柳原銀行記念資料館と連携し、資料館所蔵の映像資料の可能性を実践的に探ることを目的としている。

2016年には、崇仁地域のうらおい館東館下京いきいき市民活動センターを会場にワークショップ「声なき声——写真の細部・歴史の細部——」を開催した。このワークショップでは、資料館所蔵の家族写真を様々な領域の人たち——地域に馴染みのある人／ない人、各種専門家——と一緒に鑑賞することを通じて、個々の写真に潜勢する価値の掘り起こしを試みた。同年から翌2017年にかけて、このワークショップを踏まえた展覧会「デラシネ——根無しの記憶たち」を開催した。本展では、もともとの家族写真というコンテクストを解体したうえで展示台に写真を展開することで、いわば擬似的にアーカイブ的な場を構築した。観客が個々の写真に潜勢する価値を能動的に読み解き、他の写真を関連付けて文脈化することで、新たな歴史の物語が生成する可能性を顕在化させる試みであった。2018年には、上映展示「BANK——映画『東九条』でつなぐこと——」を開催し、1969年に公開された映画『東九条』の上映を行った。貧困の告発であったこのドキュメンタリーが、現在は当時の様子を知るための記録資料として価値付けられていること、その転換を担ったのが、かつてこの映画の監督を務め、現在は資料館の事務局長である山内政夫氏であることに注目した展示であった。

「映像アーカイブの実践研究」としてスタートした本研究プロジェクトは、本年度より「Sujin Memory Bank Project」として再スタートし、映像資料にとらわれることなく柳原銀行記念資料館の歴史を改めて振り返った。その初年度として本年は、これまでの活動を精査するとともに、柳原銀行ならびに崇仁地域の歴史についての文献を収集した。

林田 新（芸術資源研究センター非常勤研究員）